

研修員とつくる『世界とつながるまち』長崎

自治体名	長崎市
研修員名	ラケル デ ソーザ イ シウバ バルキーニャ ルス
出身国	ポルトガル共和国
研修分野	国際、観光、広報、平和
研修期間	6か月
主な研修先	国際課、観光推進課、広報広聴課他

1. 背景・目的

長崎市は市の最上位計画である第四次総合計画において「個性輝く世界都市」を将来の都市像として掲げ、「世界とつながるまち」となるような施策展開を行っている。長崎市は世界の6都市と姉妹（友好）都市提携を結んでいるほか、近年では姉妹都市提携等の形式にとらわれず、市民や民間交流団体が主体となって自由、気軽な交流を行う市民友好都市の提携を推進しており、これまで4都市と提携している。「世界とつながるまち」を実現するため姉妹（友好）都市や市民友好都市とのネットワーク形成に取り組んでいる。しかしながら、特に姉妹都市の交流は、どうしても周年事業の訪問団の派遣と受入れがメインイベントになりがちで、日常的につながりを持つことが課題となっていた。そこで、姉妹都市から研修員を招聘し、研修員が今後の長崎市との関係において「文化交流、経済交流のキーパーソン」となることを目的として、この事業を行うこととした。平成25年は姉妹都市提携35周年を迎える都市が3都市あり、姉妹都市提携35周年の記念イベントも予定していたため、そのうちのひとつのポルト市を選定した。

2. 事業実施にあたっての工夫、苦労したこと

研修員は、これまで日本語を勉強したことがなく来日時の全体研修で初めて日本語を学んだため、研修を始める段階で日本語のレベルが研修を行うまでに達していなかった。そのため英語で研修を行うこととなり、研修内容に制約が生まれた。しかしながら、長崎市国際ボランティアが行っている日本語講座に定期的に参加したりすることで研修が終わるまでには、日本語において一定の上達が見られた。



小学校での授業の様子

研修については、長崎市とポルト市とのつながりを実感してもらうことと市民とのふれあいに重きをおいて行った。そのため、市や県に残る史跡を実

際に現場に見に行き、その際に学び、感じたことなどを小・中学校、大学、長崎日本ポルトガル協会などで発表を行った。このようにインプットとアウトプットの機会を提供することで、ただ史跡を視察したという一時的な経験に終わらせるのではなく、両市の交流がどのような歴史的背景のもと育まれたものかを認識し、より深い洞察をしてもらうよう工夫した。

広報分野の研修では、広報誌の取材同行はもちろん、自分が出演するイベントの告知の短い原稿を書いたり、市の情報を発信する TV に出演するなどした。

長崎市独自の研修分野である平和に関する研修では、8月9日の平和祈念式典に出席する駐日大使館関係者のアテンドをすることで、厳粛な平和祈念式典の状況を肌で感じさせるのと同時に、大きなイベントがどのように運営されているのか学ぶ機会とした。



視察の様子

3. 成果・課題

研修員にとっては、庁外のポルトガル関係団体の方の協力を得て、長崎市に残るポルトガルがルーツの遊びである「うんすんカルタ」の練習や大会に参加することで、幅広い世代の市民との交流を楽しむことができたようだ。一方、長崎市としても、11月3日に長崎市の複合商業施設の広場で行った「姉妹都市提携35周年」記念イベントに研修員が工夫を凝らして、ポルト市の紹介を行ったことにより、広く市民に姉妹都市について宣伝することができた。このように、研修員が市民とかかわりを持ち、姉妹都市を身近なものとして実感し、長崎市の国際化を推進するという目標には一定の成果がみられた。

また、研修員は帰国後も長崎市のイベント等に興味を持ち、メールを送信してくるなど、交流拡大に意欲を示しており、交流のキーパーソンとしても今後、期待できる場所である。

今後の課題は、来日前の日本語学習のサポート体制と研修内容の充実を図るため、関係課との連絡・調整を頻繁に行うことである。

長崎市がまいた種と研修員がまいた種の今後の成長が楽しみである。